

---

# アンラッキー？

えがわ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アンラッキー？

### 【Nコード】

N0772Z

### 【作者名】

えがわ

### 【あらすじ】

朝っぱらから自転車ドミノをやらかしてツイてない水曜日。これが飲まずにやってられるか！

「自転車の片側スタンドの存在が憎い。滅べ片側スタンド！」

本日ノー残業デー、居酒屋でジョッキを掲げながら高らかに呪詛の言葉を吐く。

ジョッキを持つ私の右手小指は包帯で白い。

「あはは、片側スタンド撲滅委員会でも立ち上げますか？ 僕、籍だけなら置きますよ」

カウンター席、私の右側でいかげんな相槌を打つのは、数ヶ月前まで同じ部署だった後輩の高津くん。

高津くんは、私を教育係に据えられて一年間頑張った後、他部署へと引き抜かれていった人だ。

今日こうやって一緒に飲んでいるのは特別仲がいいとかそういうことじゃなく、ただ単にムシヤクシヤしながら会社を出たところで、たまたま顔を合わせたのが理由。高津くん、運悪い。

あっはっはーゴメンネー愚痴聞かせちゃってさー、なんて全然心なんかこもっていない謝罪を口にしながら、一応付き合わせて悪いっていうポーズはとっておく。

ん、なんだ、高津くんの、会話をいかげんに流す癖はもしかして私のキョウイクのタマモノか？ やだわあ。

でも私は気にしないぞ。とにかくこの身の内にたまった憤懣やるかたない思いをぶちまけるのが、今の私の急務であることよ。まずは聞け。とにかく聞け！

「何が楽しゅうて、朝っぱらから自転車ドミノをやらにゃならんの

か！」

駅の駐輪場で片側スタンドの自転車を倒して、見事にドミノ倒しになったんだよ！

ついでに突き指だってしちやっただよ！

「楽しかったら、それちょっとオカシナ人ですよね」

「だよね！ それもこれも全ては片側スタンドが悪い……なにあの不安定さ。フラフラしてるなら最初から倒しておけばいいんだよ。そしたらその上にまた駐輪できるのに」

「いやいやそれ無理がありますよね、やけくそな論理展開に突入してますよね」

「高津くんは私の味方なの！？ 片側スタンドの味方なの！？」

「え、そこ同じ土俵に立っちゃっていいんですか」

「どっち！」

「先輩です」

うむ。

ゴネる酔っぱらいのあしらいの方がよく分かっているね高津くん。

先輩は嬉しいよ！

ふふふとご機嫌にジョッキの中身を減らしていると、ふっと苦笑する気配がして骨張った手が伸びてきた。

「先輩、こんな怪我して大変でしたね。キーボード入力で不便だったでしょう？ 痛みますか？」

そう言って、そっと包帯の縁に指を這わす。わあ、なんかざわつとした！ き、気のせい！ 気のせい！

「分かってくれる！？ そうなんだよ、包帯が邪魔でキーを二

個いっぺんに押しちゃったりしてさ!」

ははは!

誤魔化し気味に笑ったら、今度はふう、とため息をつかれた。

「僕ね、先輩のことを仕事の上では尊敬していますが私生活での先輩は危機管理能力に欠けるって思ってるんですよ」

「な!」

いきなりのダメ出し。なんでだ。

「そりゃあ私も落ち着きがなかったかなって反省はしてるけど、誰だって朝は慌て気味なものなんじゃないの?」

「そこじゃありませんよ」

「じゃあどこ」

口に出して、あ、しまったと思った。

高津くんが、にやりとしか言い表せないような笑みを浮かべたからだ。

「じっくりお答えさせていただいても?」

「や、やっぱいい!」

「そうおっしゃらずに。ね?」

「たたた高津くん、まずその手を離して欲しいかなーなんて」  
「ダメです」

にっこり。

「先輩はね、警戒心が薄すぎるんですよ」

「危機管理能力の欠如とか警戒心の不足とか、さっきからさんざん

じゃないの……」

「事実です。そもそも先輩、今どういう状況か理解してます？」

「高津くんが私の手を握ってる」

「そうですね。その理由について、今まで思い当たることがあったかどうかで先輩の危機管理能力なり警戒心なりを量れようってものですが、おそらく今は急展開になりそうな状況に頭がぐるぐるし始めてるってところで有り体に言えば先輩は鈍い」

「立て板に水……」

あんどりと口を開けて呟けば、むに、と頬をつままれた。

「いひゃい」

「痛くありません痛くしてませんそしてむかつく」

「ひりよい」

「酷いのはどっちですか。僕、今まで結構分かりやすくアプローチかけてたんですけど気付いてました？ 分かっててあそこまでの見事なスルーだったらどうしてくれようってなものですが」

どうしちゃったの高津くん。こわいそして黒い。

「かわいい後輩だと思ってたのに……」

「はっ、そんなあやふやな立場あったところで何になるっていうんですか。そんな毒にも薬にもならない立場なら、セクハラ社員として訴えられた方がまだましだ」

「なに言っちゃってるの高津くんー！？」

ご乱心なの！？ オカシイでしょそれ！

明らかにツツコミ待ちだよね、って発言に口を開くと、

「ひっ」

頬をつまむ指を外されて、するりと親指で下唇をなぞられた。

「~~~~っ！」

ギャー！  
艶めかしいことしないでー！  
なま

「先輩のペースに合わせていたら、一生距離を縮めることなんてできないとつくづく感じてたところに声をかけてくださってありがとうございます。これはやはり自分のペースで進めろという天の思し召しと思うことにして」

「勘違い！ それ勘違いだから！ それ以上言わないで」  
「もう黙って—— 遙香さん」

慌てふためいて、隣りに座るひとの体を押しつけようとする私の肩に手を置き、高津くんが耳元で低く囁く。

名前呼びにビクリと体をふるわす私に、なおも言葉を重ねる。

「お願いですから僕に口説かれて。目標は今夜キスまでたどりつくことです」

ガターン！

私は椅子から転げ落ちた。

「ほらやっぱり分かってなかった」

に、と笑いながら差し伸べられる手をどうしろと！

「辛い時間はまだ20時にもなってません。夜はまだこれからですね？」

こわいこわいこわい！

なんか見たことない色気振りまいてきたよ！      ピンチ！      ピンチだよ私！

「今夜、先輩に誘われたのはラッキーでした」

私は絶対ツイてない！

ねえ、これって私が鈍感だから陥った状況ってわけじゃ、ないよね？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0772z/>

---

アンラッキー？

2011年12月2日22時46分発行